

山口ゼミナール

「海の京都」巡検報告（舞鶴・伊根・天橋立）

国際日本学部 国際文化交流学科3年

上野夢叶・内山結菜・中新佳那・中村りりか

はじめに

観光地理学を専攻とする山口ゼミナールでは、2024年9月17日から9月19日にかけて京都府北部で巡検を行った。「海の京都」と称される地域を実際に訪れ、景観観察や現地の方へのヒアリングから得た学びが多くあった。本稿では、舞鶴、伊根、天橋立での巡検内容を報告する。

舞鶴

京都府舞鶴市は、舞鶴湾に面する人口約75,000人の都市である。舞鶴市は、神奈川県横須賀市、広島県呉市、長崎県佐世保市とともに、明治時代に海軍の機関である鎮守府が置かれた軍港都市として発展した。

舞鶴には1901（明治34）年に鎮守府が開庁した。赤れんが倉庫が、軍需品等の保管庫として1900年から1921（大正10）年までに次々と建てられた。1904年に軍港学送線が開通し、ほとんどの倉庫でその内部まで線路を引き込

み、1972（昭和47）年の廃線まで貨車等により物資を運搬していた。

現存する赤れんが倉庫は、れんが造2階建11棟、鉄骨れんが造1棟である。この赤れんが倉庫の保存・保全という取り組みは、はじめから重要視されていたわけではない。1990年に赤煉瓦ネットワークの第1回シンポジウムが舞鶴で開催され、全国19都市から200名以上の参加者を集めた。これにより市内でも注目度が高まり、赤れんが倉庫群が「舞鶴赤れんがパーク」として整備され、発展してきた。2016年には「旧鎮守府横須賀・呉・佐世保・舞鶴」日本近代化の躍動を体感できるまち」として「日本遺産」に認定された。

巡検初日は、まず1号棟にあたる舞鶴市立赤れんが博物館の見学と、海軍ゆかりの港めぐり遊覧船に乗船した。次に、赤れんがパークの管理・運営を行っている株式会社ウッディーハウスの猪野隆太氏からお話を伺った。ウッディーハウスは、「地方にも本物を」をコンセプトに、市内に2店、京阪神と東海地方に10店の実店舗を構えながらネット事業を通じて洋服通販を行っている企業で

ある。「赤れんがパーク官民連携型賑わい拠点創出事業」選定委員会による審査で選定され、2022年から舞鶴赤れんがパークを市の観光拠点とすべく管理・運営を進めている。以下、ヒアリング内容と私たちが考えたことを記す。

最初に、赤れんが倉庫を地域資源として観光地化するための取り組みについて伺った。ただ観光地として発展させるだけではなく、地元住民にとっても心地良い場所になるための工夫が感じられた。公園という利点を活かした犬の散歩コースとして使ってもらうための工夫や、夜に散歩ことの少ない住民たちが夜に集まって食事やお酒、音楽を楽しむことのできるイベント開催など、地方都市ならではのスケール感で行われている事業が多く、興味深かった。地方都市において地域資源の活用は、地域活性化の大きな役割を担う。ウッディーハウスが赤れんが倉庫の再生に尽力を注ぎ、地域の人と人、また観光客と地元住民とをつなぐ架け橋を担っていると感じた。

続けて「歴史と観光ビジネスの共存の難しさ」を伺った。赤れんが倉庫は、重要文化財に指定されているため、一般の建物とは異なる制約があり、

その下でできることを模索していく必要がある。また、同じ赤れんが倉庫でも横浜とは圧倒的に違う人口であり、観光事業の推進の規模が異なる。これらのハードルの高さを理解しつつ、様々なプロジェクトを通して観光客誘致に取り組んでおり、舞鶴を盛り上げたいという強い意志がひしひしと伝わってきた。

海上自衛隊の拠点があることも、観光地化を進めるうえで重要になるそうだ。海上自衛隊によるイベントは全国から多くの観光客が訪れ、舞鶴赤れんがパークの集客数にも大きな影響を与えている。日本各地には、海上自衛隊の主要な基地が点在しているが、海上自衛隊との距離感が近いことが舞鶴における最大の特徴となっている。

観光振興に関する様々なアクションが行われて



舞鶴赤れんがパークのメインロード

いるが、課題も指摘されよう。まず、交通面の不利な点が考えられる。舞鶴市は京都の中心部から100kmほど離れていて、高速バスや特急列車などが利用できるものの、アクセスが良いとは言い難い。また、宿泊施設や飲食店が少なく観光客のニーズに応えられていないという点や、外国人観光客向けのサービスや看板・標識などの多言語表記対応不足など、持続性のある観光地づくりはまだこれからという印象を持った。しかし、これは一事業者だけではできないのではなく、様々な組織等との連携が不可欠であろう。

今後でも多くの観光客を引きつけることが必要だろうが、私たちのような若年層の観光客誘致という点では、ウッディーハウスが行っている赤れんがパーク事業には魅力的なものが多かった。今後の進展を応援したい。

伊根

巡検2日目は、丹後半島の北東部に位置する伊根町を訪れた。伊根湾は、日本海側に面したリアス海岸である。日本海側にありながら南に開けた

地形は珍しく、三方を山と島で囲われていることから波も穏やかである。伊根町は古くから漁業が盛んであり、漁業と生活が一体となって発展した。現在は約230軒の舟屋が軒を連ねており、2005年には重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。豊かな自然に囲まれながら貴重な漁村景観を体験できるため、近年は観光地としても注目を集めている。

観光の中心的な資源となっている舟屋とは、船を雨風や虫から守るために作られた2階建ての建物である。1階部分は船を直接海に出すことができ格納庫になっており、2階部分はかつて住居や漁具置き場として使用されていた。なお、現在ではファイバーグラス強化プラスチック船の導入や大型化により、船は舟屋の前の海上に係留されていることが多い。

伊根に着き、まず地元ガイドによるツアーに参加した。お話の中で特に印象に残ったのは、「現在の伊根は本来の伊根ではない」という言葉である。現在は土台がコンクリートでできている舟屋であるが、かつては石材が使われており、2階は床板を張り詰めない板を渡しただけの茅葺の家だった。その昔、風通しの良い簡素な造りだったのは、舟屋が漁業用の場所に過ぎず、居住機能は母屋にあったからだ。2階は漁業従事者が休憩時間に使っていたため「若衆宿」と呼ばれていた。

舟屋の1階部分を見学すると、網などの漁に必要な道具があり、船が入りるところまで海水が入ってくるようになっていた。床底がスロープ



舟屋から撮影した伊根湾と青島

状になっており、バックして船を引き揚げることのできる仕組みになっている。また、船の出入り口には網で作られたすだれのようなものがあり、扉を取り付けていないため風通しが良く、開放感があった。

伊根にはアジアをはじめ、多くの外国人観光客が訪れている。今日の日本において外国人観光客を見かけることは珍しいことではない。しかし、京都駅から電車やバスを乗り継いで3時間ほどかかる伊根町にも外国人観光客が多く訪れていることは意外であった。京都市内の中心的な観光地とは異なる伝統的な舟屋が残る景観を求めているのではないかと推測した。なお、ガイドが対応している言語は、日本語の他に英語とスペイン語だという。

次に、海上タクシーに乗船した。伊根湾を周遊

する船は、30分ごとに運航する大型遊覧船と海上タクシーの2種類がある。前者は外国人観光客が多い印象に対し、後者は伊根町にある程度精通している旅行者が多い印象を受けた。海上タクシーでは地元の方が操縦とガイドを務めていた。大型遊覧船と比較すると、地元住民とより親密な関係を築ける体験だと考えた。また、船内ではウミネコのエサやりができるので、子どもから大人まで幅広い年代の方々が楽しめるアクティビティだと感じた。海上から見

る舟屋は一味違い、まるで海に浮かんでいるような舟屋の景観を実感することもできた。特に印象に残ったのは、岸から見て正面に位置する青島の存在である。青島は日本海からの雨風や荒波を防ぐ防波堤の役割をしており、穏やかな波をつくっている。そのため、年間の潮の満ち引きはたったの30cm程度である。このように、穏やかな波が流れる地理的条件だからこそ、海と家が共存する舟屋がつくられているのである。

午後には伊根町議会議員の和田義清氏からお話を伺った。伊根町を訪れる外国人観光客には、台湾からの観光客が多いという。その要因としては、台湾の親日性や、伊根町のファンクラブサイトが開設されていることが挙げられる。中国や香港、東南アジアからの観光客も目立っているという。多くの外国人観光客が訪れることで、宿泊施



伊根湾の海上タクシーから撮影した舟屋

設の備品を持ち帰るケースが多発するなど、様々な問題も生じているそうだが、一時期は外国人観光客を断る宿泊施設もあったが、現在は張り紙やSNSなどで注意喚起を行うことで対応している。また、観光地として栄える伊根町であるが、観光業に携わっている人は町民のごく一部であることも忘れてはならない。様々な思いを持った町民が存在するのである。

伊根町内の交通手段には、通称「いねタク」と呼ばれる伊根タクシーがある。「いねタク」は一律300円であり、地域住民のみならず観光客も気軽に利用することができる。「いねタク」は太

陽光発電による電気自動車を用い、伊根町が京都府や国からの補助金の申請を行っているという。他にも、伊根での観光現象や移住者の流入に関することなどを伺い、考えを深めることができた。

天橋立

巡検3日目は、まず天橋立ビューランドから天橋立の飛龍観を堪能した。次に、文珠地区にある「知恵の文殊」で知られる智恩寺を訪ねた。最後に、船が通る度に回転する廻旋橋を渡って天橋立の砂州を散策した。

天橋立は、古文書や絵図、写真などで見ると、土壌や植生、地形が現代まで大きく変化し続け、同時に景観も大きく変化している。そのため「生きている天橋立」とも言われていた。昔は天橋立の松葉を集めてかまどや風呂の焚き付け材に使っていたことで、長期にわたって白砂青松の風景が継続していた。しかし、人間が焚き木ではなく電気やガスを使用する生活に転換したことで、地域の人々が天橋立で枝葉を採取しなくても済むようになった。実際に、海へとつながる木々に囲まれた白砂の道を歩いてみると、一見白砂青松の風景が広がっているように思えたが、松の木の中に意外と他の樹木も生えていたり、大きな松の木が立ち並んでいる根元には雑草が生えていたりして、事前学習で学んだ植生の変化を目で感じる事ができた。



天橋立飛龍観を背景に山口ゼミ集合写真

おわりに

京都府北部の舞鶴、伊根、天橋立を訪問し、景観を眺めたり、現地の方々のお話を伺ったりすることで、観光ではなく地域を巡る貴重な経験をし

た。事前学習を通じて得た知識により、通常の観光では見過ごしてしまうような景観に着目できた。この巡検で学んだ知見を、今後の論文精読や4年次に取り組む卒業論文に役立てていきたいと考えてる。

なお、本稿は現地で見聞きしたことや入手したパンフレットと、以下の参考文献をもとに作成した。写真は巡検期間中に撮影したものである。

【参考文献】

伊根町観光協会、伊根の舟屋とは、

<https://www.i-ne-kankou.jp/funaya>

(最終閲覧日2024年11月21日)

上杉和央2020、景観の変遷を読み解く、『歴史は景観から読み解ける―はじめての歴史地理学―』146・171、ベレ出版、

海と日本PROJECT in 京都、伊根―神が宿る島「青島」―、

<https://kyoto.unihio.jp/information/>

1906oshima/

(最終閲覧日2024年11月21日)

舞鶴赤れんがパーク、舞鶴赤れんがパークの歴史、

<https://akarenga-park.com/about/>

(最終閲覧日2024年10月19日)

河森一浩2022、『宮津天橋立の文化的景観』

とまちづくり、奥谷三穂・上杉和央編『くらしの景観―日本と中国の集落―』53・92、臨

川書店、